高齢者におけるインターネット上のトラブル経験者の特性

水野一成[1)]、近藤勢津子[1)]
1)NTT ドコモ　モバイル社会研究所

【目的】高齢者の中で、インターネットでトラブルを経験したことのある人の特性を明らかにする
【方法】2025 年 1 月に全国（性別・年齢・地域・都市規模で割付）の 65 歳から 84 歳（回答者数 1,031）を対象に実施した訪問留置法による実査結果を用いた。分析対象はスマートフォンまたはパソコンの利用者かつ、全ての目的変数・説明変数に回答した 724 人（60 代後半 229 人、70 代前半 227 人、70 代後半 174 人、80 代前半 94 人）。分析には数量化理論第Ⅱ類を用いた。倫理的配慮：研究（実査）を実施する上で、研究所内で指導的役割を行っている専門家による審査・指導を受けている。また調査結果は統計的処理をし、個人を特定しないこと、さらに調査は強制ではなく調査員が調査内容の説明等インフォームド・コンセントを行った上で、調査への了承を得ている。
【結果】目的変数は「インターネットでトラブル経験の有無」とし、経験がある人は 9.5%であった。なお、経験がある人を対象にその内容を確認すると、「詐欺サイトに騙されそうになった・騙された」がもっと多く 69.6%、次いで「アカウント乗っ取られた」が 18.8%、「なりすましの被害にあった」が 15.9%と続いた。また、説明変数は「ICT 関連」「ライフスタイル関連」「属性」それぞれ 3〜5 変数、計 12 変数で分析を行った。なお、判別的中率は 78.5%、相関比 η^2 は 0.15 であった。

説明変数の偏相関係数を高い順に、カテゴリースコアからインターネット上のトラブル経験者の特性を明らかにした結果、最も偏相関係数が大きかったのは「SNS の利用状況」であった。LINE だけでなく、Facebook、Instagram、X、TikTok のいずれかも利用している人にトラブル経験が多い傾向が見られた。次に偏相関係数が高かったのは「パソコンの利用時間」で、利用時間が長いほどトラブル経験が多い傾向であった。その次は「メディアリテラシー」で、特に高いまたは低い人にトラブル経験が多く、中間（やや高い・やや低い）層はトラブル経験が少ない傾向であった。続いて、「個性派・同調派」であり、「個性派」、「対面・非対面交流頻度」では「対面のみの交流」、「イノベータ得点」は得点が高いほどトラブル経験が多いことが確認されました。一方、目的変数との偏相関係数が低い説明変数としては、属性に関わる「性別」「年代」「教育歴」「家族構成」「経済的ゆとり」、および ICT 関連の「スマートフォンの利用時間」であった。
【考察】インターネットでトラブル経験の多い高齢者の特性を 2 つの視点で考察する。1 つ目は主に ICT 関連である。LINE 以外の SNS を利用している人は 22.9%で少数であること、イノベータ傾向であり、メディアリテラシーが高い。メディアリテラシーが高い人はインターネットの利用時間、特にパソコンの利用時間が長い。これらのことから、高齢者の中でも ICT を先進的利用している人はトラブル経験が多い。なお、メディアリテラシーに関しては低い人もトラブル経験が多い。リテラシーが低い高齢者が、インターネットを利用することで、トラブルに巻き込まれることは合点がいく。2 つ目は社会階層に関連する項目（教育歴・経済的ゆとり）との関連は低い傾向であった。高齢者の社会階層に関連した社会課題ではＱＯＬや健康に関するもの等が

あるが、インターネット利用に関してはその傾向は確認できなかった。

今後、SNS の利用などがさらに高齢者に広がると、SNS やイノベータとの関連が低くなっていく可能性がある。そうした時に、高齢者がより安全・安心にインターネットを利用する為にはメディアリテラシーの醸成が課題として残り続ける。インターネットの利活用の普及と合わせ、リテラシー向上に繋がる取り組みも求められるのではないか。